

---

# M i s s アニーの証言

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M i s s アニーの証言

### 【Nコード】

N 0 5 5 7 H

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

お腹がやけに膨らんでいるアニー。父親が誰かなんて話してたら何と自分で。チェッカーズシリーズだい四十一弾、藤井兄。大土井コンビの曲です。

## 第一章

### M i S S アニーの証言

「おい、見てみるよ」

「ああ、相手は誰なんだろうな」

皆アニーを見て噂する。噂の理由はもうはつきりとしていた。

「あんなに腹大きくさせてな」

「めでたい野郎は誰か」

「是非顔をおがみたいもんだぜ」

「全くだ」

町の皆がこう話して笑い合う。何を隠そうこの俺もだ。今日もジーンズに皮ジャンにリーゼントのいかした格好で偉大な母国アメリカの車をかつ飛ばしてカレッジに通いながら皆とアニーの噂に興じていた。ところが。そんな気軽な日はあつという間に終わっちまった。

「んっ!？おい」

「そのアニーだぜ」

「ああ、間違いないな」

車を家に置いてパブで仲間と飲んでいるとそこにアニーが来た。相変わらず風船みたいに膨らんだ腹をしてやがる。顔も身体他の部分も前と全然変わらないから腹が余計に目立っている。まあ顔は可愛い。ソバカスもあって典型的なヤンキーガールってわけだ。気は強いが根は純情。やっぱヤンキーガールはこうでないと駄目だと俺個人としては思っている。この考えには随分文句もあちこちから言われたが。

「何でこんなとこに来るんだろうな」

「飲みにか?」

「あいつは酒やらないだろ」

パブのカウンターに陣取る俺達はわざと暗くさせてバラードやら

ジャズやらを流している店の中を進むアニーを見つつ話をした。とりあえず妊婦の来ていい店じゃない。

「じゃあ何でここに？」

「さあ」

仲間の一人が悪戯っぽく肩をすくめてみせる。今は見ても何も思わないが人をコケにするには最高の仕草だ。もっともこの仕草を人を馬鹿にする時に使う奴は大抵猿程度の頭しかないが。

「何でだろうな」

「案外あれじゃねえのか？」

「あれって？」

「あれっていったらあれだよ」

これで通じたら凄い言葉のやり取りが続いた。

「お腹の中のベビーの父親を探してるんじゃないのか？」

「父親!？」

俺はその言葉を聞いて不意に声をあげた。

「父親をかよ」

「おいおい、何言ってるんだよ」

その父親のことを話に出して来た奴が笑いながら俺に言って来た。

「当たり前だろうが」

「何が当たり前なんだよ」

「アニーはマリアか？」

「いや」

この言葉にはすぐに首を横に振った。これでも真面目に神様を信仰しているつもりだ。それを忘れたことは一度もないと誓って言う。教会には毎週通っている。

「まさか。マリア様は一人だけさ」

「そうだよな。じゃあわかるな」

「父親は絶対にいるってことか」

「どんな奴にだって父親はいるさ」

そいつはまた言ってきた。

「誰かわからねえ奴も中にはいるけれどな」

「それは余計だよ」

そのタチの悪いジョークにはこう返した。

「とにかくだよ。父親を探してるのかよ」

「そうじゃないのか？」

俺だけじゃなく他の奴等にも言った。

「あれはよ。探す顔だぜ」

「父親はわかってるのかよ」

俺はブラッディマリーを飲みながら呟いた。トマトの洒落たカクテルだ。アメリカ人ならこうした場所で洒落たものを飲む。俺のポリシーだ。

そのポリシーを行っている俺のところにそのアニーが来た。そうして俺に笑ってきた。

「ねえ」

「何だよ」

「探したわよ」

そのソバカスの顔で笑いながら俺に言ってきた。

「やっと見つけたわ。ここにいるのね」

「!?!? 何でだ？」

今考えてみれば間抜けな質問だった。お腹のベビーの父親を探しているっていう奴にこう言ったのだから。けれどこの時はまさか自分だとは思っちゃいなかった。

「全く。いつもふらふらしてるんだから」

「ふらふら!?!? 違うな」

俺はブラッディマリーを置いてからキザに笑ってアニーに言っ  
てやった。

## 第二章

「俺は探してるんだよ」

「何を？」

「夢をな」

そんなの特に考えたこともないがわざとこう言ってやった。

「いつもな。夢ってやつをな」

「夢を探してるの」

「そうさ、アメリカンドリーム」

口からでまかせだ。カレッジを出たらトラックの運転手になろう  
と思っている。プレスリーが最初それだったせいもあるが俺にとっ  
ては最高にいかした仕事だった。大きな車を駆って広いアメリカの  
あちこちを行くってことが眩くて仕方がなかった。もうそっちの免  
許も取っていた。

「それを探してるんだよ」

「難しいことはわからないけれどさ」

俺のそのでまかせを首を左に捻って聞いているアニーだった。

「とにかく。夢が欲しいの」

「そうさ。幸せのな」

「それならここにあるわよ」

ここでまた笑いながら俺に言って来た。

「ここにね。ほら」

「ほら！？」

「そう、ここ」

そう言っただけで自分のその風船を入れたみたいな腹をさすってきた。

「ここにあるわよ。あたし達の夢がね」

「風船にか？」

「何言ってるの、赤ちゃんよ」

今の俺の言葉にはやけにふてくされてきた。今度はこいつの顔が

風船になっちまった。

「赤ちゃんよ、あたし達のね」

「はっ!？」

何を言われたのかわからなかった。それで思わず声をあげちまった。

「御前今何だったよ」

「だからさ。赤ちゃん」

また言って来た。

「あたし達のね。赤ちゃんよ」

「馬鹿言え」

周りじゃ仲間達がアニーの今の言葉に目を丸くさせて飲むのを止めちまっている。カウンターにいる黒人のマスターも一緒だ。何か店に流れているジャズの音楽まで止まっちまったようだった。

「何で俺なんだよ」

「俺なんだよって覚えてないの」

「何時俺が御前とそうなったんだよ」

全然覚えちゃいねえ。大体俺が好きなのはガソリンスタンドのリンダだ。あの緑の明るい目がたまらねえ。確かに今ここで前にいるのがアニーじゃなくてリンダだったら。不意にこんなことを考えたりもした。

「俺は知らねえぞ」

「九ヶ月前よ」

また随分昔の話だ。

「九ヶ月前よ。覚えてないの!？」

「だから何なんだよ」

いい加減いらっとしてきて顔を顰めさせた。

「九ヶ月前に何があったんだよ」

「満月の夜」

「満月!？狼男かよ」

マジでそう思った。とりあえず俺の話じゃないと思ったかった。

「そりゃ。狼かよ」

「違うわよ。だから、満月の日のパーティーにね」

「ハロウインの時か？」

不意に仲間の一人が言った。

「去年のよ」

「ああ、あの時か」

「そういやあの時満月だったよな」

仲間達がここで一斉に言い出した。そういえば毎年カレッジやハロウインにパーティーだ。それははつきりと覚えている。去年のやつなら俺も参加した。

「ほら、狼男になってたじゃない、あんた」

「そういやそうだったか」

狼男の話を出したところでまたアニーに言われた。そんな変装をして遊んでいたことはまあ覚えてはいる。今は全力で忘れたいが。

「あの時はな」

「それであたしが魔女でね」

「御前が魔女だったのかよ」

「あんた、もうべろべろに酔ってそれでもあたしを送ってくれて」

「そうだったか」

「ハロウインは金曜だったわ」

こいつはこんなことまで覚えてやがった。当然俺は覚えてなんか  
いねえ。

「その時にさ。送ってもらって」

「それで？」

「あんたの青いクーパーで」

右目をタイミングよくウィンクしてきやがった。

「狭い中で苦勞したじゃない。狼男と魔女が」

「何だ、やっぱりそうかよ」

「御前等できてたんだな」

「これでわかったぜ」



ここでもいいタイミングで皆が入って来た。

「父親は御前で」

「母親がアニー」

「これで万事解決ってわけだ」

「勝手に決めるんじゃないよ」

自然と俺の目が座っているのを感じた。

「そんなのよ。大体それが証拠になるのかよ」

「あたし浮気なんかしないし」

「その言葉がどれだけ信用できるんだよ」

その座って目をアニーにも向けた。言っておくがこれは酒のせいで目が座ってるんじゃない。それとは別の理由で座ってる話だ。

### 第三章

「俺だってよ。ここんとか一年彼女なんてよ」

「だからあたしが」

「御前なわけねえだろうが」

またアニーに言ってやった。

「証拠はあるのかよ。俺のガキだって証拠は」

「じゃああと一月待ってみる？」

「当たり前だろうが」

無然として答えてやった。

「それからだ。話は」

「わかったわ。それじゃあさ」

「何だよ」

いい加減しつこいと思った。だが今は聞いてやった。というか今のこいつの目を見ていると聞かざるを得なかった。そうさせる目だった。

「若しその子がね」

「ああ」

「あんたそっくりだったら？」

こう言ってきた。

「それで血液型も一緒だったら？どうするの？」

「有り得るかよ」

俺はせせら笑いながら返してブラッディマリーを一気におおった。

「そんなことはよ」

「けれどその有り得ないことがあったら？」

「その時は神に誓って言うさ」

あえて強く言う為に神様を出した。

「御前と教会に言っただけよ」

「赤ちゃんと一緒に」

「そうさ」

また言ってやった。

「赤ちゃんは絶対に神様に祝福されるべきなんだよ」

「それはそうね」

私生児とかそういうのは大嫌いだった。実際のところアニーには何があってもその腹の中のベビーの父親を見つけると言ってやりたかった。最近じゃ結構変わってきたらしいがそれでも生まれてから神様に祝福されない子供はずっとそれで差別され続ける。思えば忌々しい話だ。教会のそういうところはあまり好きじゃない。

「それじゃあそういうことでね。ドレスはもう用意してあるから」

「ドレス!？」

「ウェディングのよ」

悪戯っぽく笑っての言葉だった。

「それ用意しとえくからね。楽しみにしててね」

「勝手にしな」

最後にこう言ってやった。アニーはスキップするかのよう<sup>に</sup>上機嫌で帰っていった。俺はその後姿を見届けてからまた酒を注文した。今度はジントニックだった。

「馬鹿か? あいつ」

こう言いながらそのジントニックを口に含んだ。結構きつくてそれがかえっていい感じだった。

「俺が親父なんてよ」

「覚えてねえのかよ」

「御前は」

「全くな」

こう仲間達に答えた。全員酒に戻っていた。

「そんなのはよ。初耳だぜ」

「初耳か」

「驚いたなんてものじゃねえ」

こうも言った。

「つていうかマジかよ」

「だからよ。マジみたいだぜ」

「アニーはよ」

「嘘を言う奴じゃねえだろ」

仲間の一人はこうも俺に言ってきた。見ればそいつが飲んでるのは今俺が飲んでるのと同じジントニックだった。たまただだったが何か妙な縁も感じた。

「アニーは」

「それはそうだけれどな」

俺はそれは知っていた。

「あいつはな。それはないな」

「だったらよ。やっぱり」

「御前じゃないのか？親父は」

「あのベビーのよ」

「そんなわけねえだろ」

俺はこのことは意固地なまでに否定した。

## 第四章

「何で俺とアニーがなんだよ」

「酔ってたんだろ？あの時」

「ああ」

そのことは認める。

「もう何も覚えちゃないまでにな」

「気付いたら俺のベッドの上だった」

とりあえずパーティーで安いシャンパンなりビールなりを出鱈目に飲んで鶏やケーキもかなり腹に入れたのは覚えている。そこから全然だった。

「車は運転したか？」

「したんじゃねえのか？」

「御前あの時青のクーペだったんじゃねえのか？」

「俺は飲酒運転はしねえんだがな」

それが俺のポリシーだ。その時だって車は家に置いていった。青のクーペは家の車だ。けれどそれを使ったような気もするのは確かだ。

「それはよ」

「まあそれも一ヶ月後だ」

「その時にわかるな」

「御前が親父だってな」

「馬鹿言え」

これは本音からの言葉だった。

「俺なわけねえだろうが」

「けれどアニーはそう言ってるぜ」

「違うさ。あいつの勘違いだよ」

こういうことにしたかった。

「それはよ」

「じゃあ親父は誰なんだよ」

「御前じゃなかったらよ」

「さあな」

正直そんなのわかるか、と言いたかった。けれどそこまでは言わなかった。

「どっかの誰かだよ」

「どっかのかよ」

「ジミーじゃねえのか？」

本当に適当に言ってやった。カレッジのバスケット部にいる奴だが結構な間抜けだ。それで間抜けのジミーっていうのがそいつの仇名になっている。

「あいつじゃねえのか？」

「あいつ彼女いるぜ」

「おい、マジかよ」

今度はその言葉に驚いた。

「あいつに彼女がかよ」

「ああ。テニス部のロザリーな」

「あいつと付き合ってるぜ」

「嘘だろ、あいつとロザリーが」

ロザリーは結構な美人だ。ブロンドの長い髪と笑顔がいい。しかも脚にスタイルも抜群だ。カレッジでもかなりの美人で有名だ。

「何でそうなったんだよ」

「幼馴染みだかららしいな」

「あの二人」

「そうだったのかよ」

聞いてびっくりだった。というか酔いがかなり醒めた感じになった。それでも飲むことは飲むが。だがそれが随分と醒めた感じになったのは確かだった。

「あの二人がか」

「ジミーはあれで誠実だしな」

「だからだっていうぜ」

「誠実かよ」

「だからな。御前も」

「いざって時にはな」

「誠実にしろってことか」

こいつ等の言いたいことはもうはつきりわかっていた。

「そう言いたいんだよな、御前等」

「その通り」

「わかってるじゃねえか」

「だったらな。いいよな」

「もしそうだったらな」

有り得るかという言葉を思いきり含ませて言ってやった。

「その場合はな」

「よし、言ったな」

「それじゃあな」

「ったくよお。何なんだよ」

俺はたまりかねた声でまた酒を一氣にあおった。それでまた注文する。今度はカシスソーダだった。

「変なことになったぜ」

「まあそう言うなよ」

「これも人生」

急に適當なことを言っけきやがったと思ったがその言葉は酒と一緒

緒に飲み込んだ。

「一杯やって」

「酒かよ」

「話聞いたらあれじゃないか」

「酒がはじまりだろ？」

俺がそのハロウインの日べろべろだったことを言ってきた。

「だったらな。今だってな」

「これで気を晴らせよ」

「酒には酒か」

言いたいことはわかった。中国か何処かのアジアの国での諺で毒を以って毒を制すっていうのを思い出した。それでも本は好きなのもりだ。

「それだよな」

「まあそういうことだな」

そしてそれは隠されることはなかった。

「じゃあ。やれよ」

「これどうだ？」

「スクリュードライバーかよ」

オレンジにウオツカだ。確かにこれは効く。何しろウオツカだからだ。この連中の氣遣いなんだと今は珍しく好意的に解釈した、

「それ飲んで気を晴らせよ」

「何杯でもな」

「けれど金は俺もちなんだろう？」

ここでいつもの俺に戻ってやった。



## 第五章

「そっちはよ」

「まあそう言わずにな」

「ぐっとやれ、ぐってな」

「わかったさ。じゃあまあな」

今はこの連中の言葉に従った。それで本当にぐってやってやった。それからまた飲んでとりあえずは忘れた。そうして気付いたらその一カ月後だった。病院に呼ばれた俺が言われた言葉は。

「御前だつてよ」

「おい、マジかよ」

一緒に来ていた奴等が先にアニーの部屋に言って聞いてきた言葉だ。俺が今一番聞きたくない言葉だった。

「俺なのかよ」

「顔同じだからよ」

「俺達でもわかったぜ」

「顔が同じだったら俺なのかよ」

ちなみに俺は親父似だ。というよりはそのままの顔をしていると言ってもいい。本当に親父のコピーみたいな顔をしている。ちなみに俺の下は妹ばかりごろごろと四人もいやがる。家の中が五月蠅いことこのうえない。

「それだけでよ」

「いや、本当に御前そっくりだからな」

「本当に見てみろって」

「嘘だったら承知しねえからな」

内心嘘であってくれと願いながらの言葉だった。本当にアニーのベビーの父親が俺だったらと思うと暗澹たる気持ちになる。とにかく神様に祈りながらアニーの部屋に行くと。俺がいた。

「マジかよ」

「これでわかったわよね」

もう一人の俺が寝ているその横で寝ているアニーが言ってきた。  
もうあの風船みたいな腹は完全に消えて元の通りだ。魔法が解けた  
みたいに元に帰っていやがった。

「あたしの言ったことが本当だって」

「で、こいつの血液型はO型かよ」

「そうよ」

「アールエイチマイナスじゃなくてか」

少し意地悪をしてこう尋ねてやった。

「プラスのO型かよ」

「そうだけれど」

「間違いないか」

ここでやつと観念した。白い部屋の扉のところで息を大きく吐き  
出す。言うまでもなく溜息だ。

「俺のガキか」

「男の子よ」

「わかってるさ」

見ただけでわかった。こいつは絶対男だって。あれがついてるか  
どうか調べるまでもなかった。兄弟で親父に似ているのは俺だけで  
妹達は全員お袋そっくりだ。何でも男は母親に似るっていう遺伝が  
あるらしいがうちの家じゃそれは見事なまでになかった。だからわ  
かった。

「顔見ればな」

「それじゃあさ」

アニーは俺との話を一通り終えてからまた俺に言ってきた。楽し  
そうに笑いながら。

「約束だけれど」

「ああ、あれな」

何が言いたいのかも聞くまでもなかった。

「教会だよな」

「それと赤ちゃんも」

「わかってるさ。明日牧師さん呼んで来るな」

「式は」

「それはちよつと後だ」

気持ちを落ち着かせる為に煙草が欲しかった。だが病室で吸うわけにもいかなかった。そんなことをすれば早速どやされる。それに仮にも俺のガキに生まれてすぐに煙草の味を教えたくはなかった。だから今は吸わなかった。吸いたいのを我慢しながらアニーと話をした。

「御前が退院してからな」

「わかったわ。それじゃあ」

「けれどな。カレッジは卒業させてくれよ」

このことだけは言っておいた。

「これでも苦勞して入って今も続けてるんだからな」

「それで卒業したらあれだよね」

「ああ、トラックだ」

それしか考えちゃいなかった。リーゼントとトラック、これは俺のポリシーだ。それでアメリカ中を駆け巡ってやりたかった。だからそれしかなかった。

「それやるからよ」

「わかったわ。それじゃあね」

「また来るぜ」

こう言つてとりあえずアニーに背を向けた。

「またな」

「また来てくれるの」

「明日だ」

その日も言つてやった。

「俺のガキを見に来てやるさ」

「楽しみに待ってるよ」

部屋を出る俺にアニーの楽しそうな声が届いた。これが二十年前

で女房との馴れ初めだ。何が何だかわからないままできた一番上のガキは物好きなことに日本の大学に行きやがった。下のガキはハンバーガーショップに通いながらハイスクールの生活を満喫している。それで俺は念願のトラック野郎になって今も楽しくやっている。家に帰ればアニーがいつもいる。何だかんだで幸せになれた俺の女房との馴れ初め、今思うとこれもこれで楽しい思い出だ。その時はそれこそ顎も腰も外れそうになっちまったが。

M i s s アニーの証言

完

2008・11・20

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0557h/>

---

Missアニーの証言

2010年10月8日15時55分発行